

農業の社会的責任とは

何年か前から、自宅に隣接する農地を借りて家庭菜園を行っている。見よう見まねの自己流で、耕すのも、週末1日あるかどうか。従って、夏場などは注意していないと、すぐに雑草に覆われてしまう。

それでも、買ってきた苗や種のお陰で、季節ごとの収穫を楽しんでいる。今はブロッコリーくらいだが、久しぶりに汗して耕した畝に、ジャガイモを植え、ニンジン、ホウレンソウの種を撒いた。楽しみは数ヵ月後。

自慢は一切、農薬や化学肥料を使わない点だ。家庭の生ゴミを堆肥にするのでゴミ減量にもなる。収穫後は、運動不足解消を兼ねて、スコップとクワで土を掘り起こし、堆肥をすき込む。近くにプロの農家のホウレンソウ畑がある。収穫は見事だが、化学肥料を大量に使うらしく、土はコチコチで火山岩のよう。我が家の菜園の土はフワフワである。

環境の視点で農地を見ると、二つの顔を持つ。緑豊かな農地は、昔から里山と連なる生態系維持の場であり、最近では二酸化炭素(CO₂)などの温暖化ガスの削減・吸収源としての機能が注目されている。

さらに小生のような元々、農業とは無縁の者でも、素人菜園で土いじりの楽しさを味わえる。さらに癒し効果があり、「農業セラピー」の場になる。最近では、過疎地の棚田を支援し、次いでに収穫も楽しむアグリ・エコツーリズムが普及しつつある。環境に優しく、環境と調和した農の姿である。

もう一つの顔は、産業としての農から由来する負の部分。農作業による農薬や化学肥料の大量使用によって、土壤汚染や水質汚染などが生じる。また大量に水を使うほか、開墾のため自然林等を改変する。「自然の緑」と、人口的な「農の緑」は微妙に違うのだ。

環境と農業のこうした関係は、長年にわたって議論されてきた環境と経済のトレードオフ関係と近似する。経済発展のためには、ある程度、人為的環境汚染を許容せざるを得ない。一方、環境保全のためには、ある程度、経済活動を抑制せざるを得ない。

ともに、この「ある程度」が定かでなく、過去に公害を起こしたり、紛争を引き起こしたりしてきた。農業の場合も、家庭菜園ならば無農薬・有機肥料だ

けの栽培は成り立つが、食糧を安定供給し、農家経営を維持するためには、農薬・除草剤等による収量の増産、効率経営が欠かせない。ここにも「ある程度」の位置づけがカギを握る。

ただ近年、環境と経済のトレードオフ関係には変化がみられる。その一つが、企業の社会的責任(CSR)である。企業が、本業を通して、環境、社会、ガバナンス(ESG)に取り組むことが、結果的に本業の企業価値を向上させるという理解が、かなり浸透してきた。

環境を経済との対立軸としてとらえるのではなく、経済・企業活動の中に環境を組み込む「内部化」の動きである。こうした企業のCSRの動きを、農業に当てはめるとどうなるか。

農業本来の活動を通じた社会的責任をASR(Agricultural Socially Responsibility)と名付けよう。そのASRにふさわしい活動は以下のようなことが考えられる。

環境に配慮した低農薬化、家庭の食品廃棄物リサイクルと連動した有機肥料・飼料の使用、農業廃棄物の内部リサイクル化、高い農業技術・強い生産力に裏打ちされた農業雇用の安定確保、生産プロセス・製品に伴う安心・安全情報の開示。

中でも最近、農地による温暖化ガスの削減効果が注目されている。農水省の地球環境小委員会は温暖化ガスの排出削減、吸収増加に資する農地管理手法として、以下の4つを指摘している。

堆肥等の有機物の土壌への投入量の増加 不耕起栽培や省起栽培の促進
木炭等の土壌改良資材の使用の促進 多毛作の促進による緑肥等の有機物の投入量の増加、である。

他の産業は地球の浄化力に頼る経済活動を展開してきた。これに対して農業は、地球の栽培力を踏まえる。そうした地球の力(環境)を内部化してこそ、産業としての農業の持続可能性の継続と生産性の上昇につながる。

わが家庭菜園でも、農水省委員会推薦の手法のいくつかはすでに、実施済みだ。だが、の不耕起栽培は知らなかった。正直、運動不足解消の名目で始めたはずの土壌掘り起こしは、寄る年波にはこたえる。実際、過去にギックリ腰を二度ほど起している。

従って、早速この夏から、不耕起栽培を温暖化対策として、わが家でも取り入れたい。ズボラ農業がますますズボラになりそうだが。

(上智大学大学院教授・ジャーナリスト 藤井良広・ふじいよしひろ)